ポケットモンスター　～お嬢様とレックウザ～

まどろみ猫

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ポケットモンスター　～お嬢様とレックウザ～

【Ｎコード】
Ｎ４８６１Ｚ

【作者名】
まどろみ猫

【あらすじ】
無気力・無表情なお嬢様の、十六歳の誕生日。仕事で滅多に屋敷に帰ってこない父から送られてきた誕生日プレゼントは、伝説のポケモン・レックウザだった！？ポケモンを持ったことなどないお嬢様、自分には資格がないと逃がそうとするが、人語を理解するどころか話すこともできるレックウザに気に入られてしまい…！？
自分の生きることに意味を見いだせなかったお嬢様が、人と触れ合い命の大切さを学んでいく。ポケモンと人は、どのような関係であることが理想なのか？生きる意味は見つかるのか？

ジョウト地方での、知られざる少女の成長の物語。

誕生日（前書き）

ポケモンで、書きたいと願っておりましたまどろみ猫です。夢が叶って嬉しいです。

私は少しでも上達したいので、よろしかったら感想やアドバイスをお願いします。厳しいコメントも、自らの糧としていきたいと思っております。が、登場人物に対する批判はおやめください。

至らぬ点は多々あると思いますが、よろしかったらご覧ください！

誕生日

私の名前はカノン。自分で言うのも何だが、お嬢様だ。…外見は、そうは見えないだろうけど。

私の住んでいるジョウト地方は、なかなか住みやすい地方らしい。らしいというのは、私はこの地方はおろか、自宅である屋敷からも滅多に出ないからだ。

出てすることなどないし、したいこともない。だから、毎日の学習を終えると無意味に時間を潰す。昼寝をしたり本を読んだりピアノを弾いたりテレビを観たり…だらだらと、時間が過ぎていく。

両親もいない、友達もいない、ポケモンも持っていない私の話し相手は、屋敷で働くメイドさん達くらい。まぁ、話すこともないけど。

「お嬢様。旦那様から、小包が届きました」

春の、日差しの心地よい午後。ソファに寝そべって惰眠を貪っていた私は、主であるパパに代わって屋敷を管理している万能執事・ラスタの声に目を覚ました。

「…ラスタ。仮にも十五歳のレディの部屋に、ノックもなしで入ってくるなんて無礼じゃなくて？」

眠い目を擦りながら、一応抗議する。

「ノックをしても、お返事がなかったもので。…それに、お嬢様はまだまだ子供ですよ」

ふふふっと含みのある笑い方。明らかに、私の発育を笑っている。

…まな板じゃ、子供扱いされてもしょうがないか。特に怒りもせずに、手を差し出す。

「そうね。私は子供ね。…パパから便りがあるなんて、珍しいわ」

頂戴と、差し出した手。恭しく渡されたのは、綺麗にラッピングされた小さな箱。

「何かしら？…あら、カードがついてる」

広げて、声に出して読む。ラスタも、内容が気になるだろうから。
「何々…『カノン、誕生日おめでとう！十六歳になったカノンに、パパからプレゼントだ！きっと驚くぞ！カノンの誕生日を祝えないのが残念だが、パパはいつでもカノンのことを想ってるぞ！帰る日ができたら、連絡するからな！』…あぁ、今日は私の誕生日だったの？」
読み上げてから、ソファの横で控えるラスタに訊く。
「…お嬢様、ご自分の誕生日をお忘れにならないでください」
心底呆れた顔のラスタ。若いが有能なこの執事、顔までいいのだから、よほど神様に愛されている。
ただラスタにとって不運だったのは、敬愛する主人に仕えることができず、私のような娘の面倒を見なくてはいけなかったことだ。
「私の生まれた日に、何か意味があるの？」
生まれてきた日に、生まれたことに、何の意味があるというの？
「…お嬢様、旦那様が悲しまれますよ」
私の言葉の意味を察してか、ラスタは眉をひそめた。でも、それもどうでもいい。
そう、すべてがどうでもいい。私は何の為に生きているのか、わからずただ生きているだけなのだ。
無意味に、無気力に。ただ、生きるだけ。
「…旦那様からのプレゼント、ご覧にならないのですか？」
ごろん、とまたソファに寝転がった私。そのまま微睡むつもりだったのだが、ラスタの声に妨害された。
どうやら、『私が驚く』プレゼントに、興味があるらしい。
「ラスタ、見たい？」
箱を渡そうとすると、首を振られた。私へのプレゼントなのだから、私が開けなくてはいけないのだそうだ。
「…わかった。開けるわね」
普段無表情の私が、驚くものとはなんだろうか？

「これは…モンスターボール？」
小さな箱に入っていたのは、見慣れた物体だった。ただし、変わった色の。
「紫色のボール…パパがいる地方では、これが普通なのかしら？」
そっと持ち上げてみる。意外にも重い。
「ねぇラスタ。Wの文字があるわ…ってどうしたの？」
隣にいたラスタは、食い入るようにそのボールを見つめていた。と思ったら、その目が輝きだす。
「これはっ！マスターボールですよお嬢様！」
「マスターボール…ポケモンを必ず捕獲できるという、幻のボール？」
トレーナーではない私だが、知識はある。この万能執事に叩きこまれた知識が。
「さすが旦那様！お嬢様の為にこんな希少なボールを入手されるとは！」
ラスタが興奮し始めた。冷静沈着な彼は、パパが絡むと豹変する。
「でも、このボール未使用なのかしら？」
振っても、音はしない。それはそうか。
「それに、私ポケモンをゲットしたりはしないし…ラスタ、あげる」
渡すと、ポッポがタネマシンガンを食らったような顔をするラスタ。と思ったら、狼狽して突っ返してきた。
「だ、だめですよお嬢様！これは、旦那様からのプレゼントなのですから！」
優秀なトレーナーでもある彼なら、有効に使ってくれると思ったのだが…。
「そ、そうです！マスターボールがプレゼントだとは思いますが、一応中身を調べなくては！」
…素直に、受け取ればいいのに。私は、要らないのだから。
屋敷には、ポケモン転送装置がある。一般家庭にはまずないが、

パパがお仕事で使っているのだ。
使ったことがないので、ラスタに操作してもらう。慣れた指捌きでキーボードを打つと、装置に紫色のボールをセットした。
「中にポケモンが入っていたら、画面に名前と姿が表示されます。…楽しみですね」
にっこり微笑みかけてくるラスタ。子供みたいだ。
「…では、お願い」
「はい！」
たたたたっと、彼の長い指が素早く動いた。そして、画面に表示されたのは…
「…レックウザ。伝説の、ドラゴンポケモン？」
「…お嬢様！もっと驚いてくださいよぉぉぉぉぉっ！」
まったく表情を変えない私に、ラスタがツッコむ。
「レ、レックウザですよ！？ホウエン地方で語り伝えられる、幻のポケモンですよ！？」
ラスタ、驚いてるわと思いながら、こくりと頷く。
「知っているわ。読んだ本に壁画が載っていて、こんな風だったわ」
画面を指差す。長い筒状の鮮やかな緑の身体、二本の鋭い爪のついた手、これまた鋭い牙が生えた口。
「パパ、ホウエン地方にいるのかしら？」
「そこじゃないですよお嬢様」
平静を取り戻したラスタに突っ込まれる。
「…それにしても、まさかレックウザとは…さすがです旦那様！このラスタ、一生ついていきます！」
…まだ混乱しているようだ。
「…ラスタ、ついてきてくれる？お庭で、レックウザをボールから出したいのだけれど…」
こんな状態の彼では正直頼りないが、屋敷で一番ポケモンの扱いに長けているのも彼なので、同行を頼む。
「…へっ！？レックウザを、ボールから出す！？」

…それから、小一時間お説教が始まった。

誕生日（後書き）

読んで下さった方、ありがとうございます！
え～、なぜにレックウザ？と尋ねられれば、好きだからとしかお答えできません。可愛いですよねレックウザ！
シリアス、ほのぼの、ギャグ、冒険、友情、恋愛…これらの要素を含めて、頑張りたいです。
他の作品も投稿していますので、よろしかったら…その、そちらも…どうぞ。

レックウザはお怒りのようです（前書き）

お気に入りに登録してくださった方がいらっしゃったようで、驚きました。ありがとうございます！…でも、その…よろしかったら、今後の精進のために感想を頂きたいな、と…。お願いします！上達したいのです私！

今回で、ようやくレックウザが登場します。…氷技で一撃、なんて言わないでくださいよ！？弱点がないポケモンなんて、悪&ゴーストタイプだけです！

レックウザはお怒りのようです

「よろしいですかお嬢様？伝説のポケモンとは、他のポケモンとは一線を画した存在なのです。その能力たるや凄まじく、天災を引き起こしたりもします。ポケモンをお持ちになっていないお嬢様が、このレックウザを従えるのは、不可能でしょう。なぜなら…」

口をはさむ隙がない。かれこれ一時間は話し続けている。

「…ですから、レックウザをボールから出すのは、旦那様がお帰りになったときでなくては。暴走した場合、このお屋敷は壊滅し、辺り一面は火の海になるでしょう。旦那様は、私など比較にならないほど優れたトレーナーでもあられます。その日まで待って…」

「…やだ」

呟くと、ラスタの説教じみた説得は中断された。

「…お嬢様？」

「パパがいつ帰って来るかもわからないのに、ずっとこのレックウザを閉じ込めておくの？私はこのレックウザを逃がしたい。このレックウザも、そう思ってるはずよ」

紫色のボール。人からすれば夢のようなこのボールは、ポケモンからすれば悪夢のようなボールだろう。

投げられたら、そこでお終い。パパがこのレックウザとバトルしたのかは知らないけれど、どれだけ悔しかっただろうか。

抗っても、強制的に押さえつけられ、捕獲される。そんなのは。

「…ラスタ、教えてくれたわよね。ポケモンと人は、主従の関係ではなく、対等なのだと。お互いを認め合い、歩み寄り、協力するのが真の姿だと。…嘘じゃないわよね？」

ポケモンの優れた力を、道具とみなし利用する人もいる。それは、知っている。

「…私は、このレックウザと対等になれるような人間じゃないの。トレーナーとしてどころか、人としても欠けている私には。だから

…」
勝手なことを言っているのは、わかっている。パパは私の為にとこのレックウザを捕獲し、私は私の考えでこのレックウザを逃がそうとしている。
私達親子の都合に振り回されるレックウザからしてみれば、たまったものではないだろう。
「…お嬢様」
顔を上げると、ラスタが辛そうな顔をしていた。何で？
「わかりました。このラスタ、お嬢様のお心のままに」
一礼すると、ラスタは私の手を取った。
「…ご安心ください。お嬢様は、私がお守りします」
庭へと向かう彼に手を引かれている私は、その背中ににじむ覚悟に、罪悪感と感謝の念を抱いた…。

屋敷の使用人を全員避難させ、敷地内にいるのは私とラスタと、彼のポケモン達だけ。
「…さぁ、お嬢様。ボールを投げてください」
緊張に顔を強張らせた彼。その隣で闘志まんまんな、彼のライチュウ。
「…ごめんなさい。ラスタ」
こんなの、執事の仕事じゃない。命を懸けてまで、彼が私に付き合うことはない。
私一人なら、どうなったってかまわない。でも、彼は違うはずだ。彼を必要としている人は、確かにいる。
謝ってすむことではないけれど、謝罪の言葉が勝手に出ていた。
驚きに目を見開く彼を横目に、ボールを投げる。…全然とばない。
数メートルの距離に落下したボールから、かっと光が発せられる。
「ぐぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉん！！」
轟いたのは、咆哮。あまりにも大きなその声に、耳を塞ぐ。
「ぐるるるる…」

唸り声。巨大な伝説のポケモンが、目の前にいた。細長い筒状の身体は鮮やかな緑色で、黄色の輪のような模様がある。私を見つめる瞳は爪や牙と同じく鋭く、恐ろしい。
恐ろしい。けれど、何と雄大な姿だろうか。
私は、見惚れていた。その巨大で、美しい姿に。その、命の輝きに。
「貴様が、あの男の娘か？」
突如として頭の中で響き渡った、若い男性の声。まさか、誰かいるの？
辺りを見回しても、目に入るのは綺麗に整備された庭と、レックウザと、ラスタとライチュウだけ。誰も、いない。
「お、お嬢様？どうされたのですか？」
レックウザを警戒しながらも、私を気遣うラスタ。彼には、今の声が聞こえなかったのだろうか？
「今、男の人の声が…」
「それは吾輩だ」
また、聞こえた。やっぱり、誰かいる。
「吾輩？…レックウザ、あなた話せるの？」
「ふん。話してはおらん。…まぁ、テレパシーのようなものだ。その男には聞こえておらんぞ」
ぶんっと尻尾を振ると、風圧が生まれて髪が乱れる。すごい風圧だ。
「吾輩の質問には、しっかりと答えろ。貴様が、あの男の娘かと訊いた」
「あの男？」
聞き返すと、苛立ったように尻尾を地面に叩きつける。どれほどの力で叩いているのか、地面が揺れる。
「吾輩を、貴様が手にしたそれで捕らえた男だ」
それ、とはマスターボールのことだろう。忌々しげに紫色のボールを睨むレックウザ。

「…ええ。あなたを捕獲したのは、私のパパだと思うわ」
その瞬間。とてつもない殺気を感じた。
「お嬢様！」
ラスタに腕を引かれ、私の立っていた場所にレックウザの尻尾が叩きつけられる。先程の比ではなく、地面が抉れた。
助けてもらわなくては、死んでいた。
「…ありがとう、ラスタ」
「お礼など結構です！」
背後に私をかばい、ラスタがレックウザを睨みつける。ライチュウが、頬袋からビリビリと微かに放電している。
「…これしき、自らで避けることもできないか。貴様如きが、この吾輩を従えようなど笑止千万！」
向けられた視線には、侮蔑がこもっていた。テレパシーが通じていないラスタにも、それがわかったらしい。
「…お嬢様、レックウザは何と言ったのです？」
「この程度、自分で避けられないのか。貴様などが私を従えようなど、笑わせるな！…と言っているわ」
レックウザの言う通りなので、淡々と伝える。従えるつもりはないけれど。
「吾輩を従えるどころか、貴様のような虚ろな娘に仕えねばならんその男も不憫よ。あの男に仕えればよいものを…人間の、事情というやつか？」
小馬鹿にしたように、レックウザが笑う。黒く縁どられた口が吊り上ったので、おそらく笑ったのだろう。
「…お嬢様」
通訳を、と目で乞われ、そのまま伝える。
「私を従えるどころか、貴様のような空っぽな娘に仕えなくてはならないその男も不憫だな。娘の父親に仕えればよいのに…人間の事情というやつか？…と言っているわ」
「…何ですって？」

ラスタの雰囲気が、変わった。…怒った、のだろうか？
「…伝説のポケモンだからって、好き勝手言ってくれますね。こんな人を見る目もない子蛇に、マスターボールを使う価値なんてありませんよ」
「何だと！？」
レックウザが、怒りの声を上げる。今しがたまで侮蔑を浮かべていた目は、憤怒に染まっていた。
「人を見る目がない、と言ったのです。お嬢様は、一見すると無気力で何もする気のないダメ人間のようですが、とても優しいお方です。そのことに気付きもしないあなたに、よく伝説なんて大層な呼び名が付いたものですね」
「ふん！優しいだと！？己の力もわきまえぬ人間が、偽善に酔っているだけであろうが！」
吐き捨てるように、レックウザは言った。
「実に下らぬ！」
張り詰めたような緊迫感。のどかな庭にはまったく似合わない。
…私は、戸惑っていた。ラスタの言葉に。
優しい？私が？
「お嬢様。この子蛇の通訳を、お願いします」
戸惑う私そっちのけで、睨み合う両者。
「…えっと…優しさなど、己の力もわきまえない人間が、偽善に酔っているだけだ。下らない…ですって」
私の訳を聞いたラスタは、腕を組んで笑った。
巨大な身体を見上げるその目にあるのは、勝ち誇ったような色。
「…やはり、人を見る目がありませんね。お嬢様は、自らの行為に酔いしれるような愚かな方ではありません。この方の真なる優しさを、そんな低俗なものと捉えるあなたのほうが、己をわきまえるべきですよ」
「…調子にのりすぎだ、人間！」
レックウザの怒りが、爆発した。通訳なしだが、ラスクにはその

咆哮の意味がわかったらしい。
開戦の、咆哮。
「…上等です！私の主を侮辱したことを、後悔しなさい！」
こうして、戦いは始まった…。

レックウザはお怒りのようです（後書き）

…カノンお嬢様そっちのけで、レックウザとラスタが喧嘩してますね。正直言って、彼の存在は一話限りでした。しかも、名前なしのただの執事です。ですが、話を進める上で彼の存在が必要になってくることに気が付き、こうして立派な主要人物となりました。考えた人物は全員好きですが、彼もなかなかお気に入りです。

今のところ、人物の容姿の描写はなしですが、これからの話でしていきます。現在わかるのは、カノンお嬢様がまな板ということぐらいでしょうか（笑）。

ポケモン大好きなのにバトルは苦手。こんなまどろみの作品ですが、楽しんでいただけたら嬉しいです！

見たくないの（前書き）

ごめんなさい、ラスタ。２話でのキミの名前、間違えてました。…ラスク？誰それ、です。後書きで「お気に入りです」とかどの口が言うのでしょうか。…反省してます。

え～、何故か私が投稿しようとするとエラーになります。ので、書きあげているのに更新できないという事態が起こるかもしれません。…投稿したいのですよ！？まどろみは！

…お気に入りに登録してくださった方、お読みになってくださった方、ありがとうございます。私は小説が大好きですので、これからも頑張っていきたいです！

見たくないの

「くらえ！」
レックウザの口から放たれた、『りゅうのいぶき』。
「ライチュウ！『まもる』！」
「ライッ！」
ラスタの指示に、即座に従うライチュウ。瞬時に球状の壁を展開し、身を守る。
「小癪な！…叩きのめしてくれる！」
防がれたレックウザは、尻尾をゆらりと振った。振られた尾が、鋼の輝きを帯びる。
「ライチュウ、『１０まんボルト』！」
「ラッ…」
応え、身体から電気エネルギーを放とうとするよりも早く、
「遅い！」
レックウザの尾が、ライチュウを吹き飛ばした。おそらく、『たたきつける』ではなく『アイアンテール』。
「ライチュウ！？…すまない、戻れ！」
植え込みで戦闘不能状態となったライチュウを、ボールに戻すラスタ。得意げなレックウザを、悔しげに見据える。
「…むっ！？身体が…！？」
そのとき、レックウザの動きが鈍くなった。
にやりと、ラスタが笑う。
「…『せいでんき』。ライチュウの特性です。物理攻撃してきた相手を、麻痺させる…運がないですね」
好機とばかりに、モンスターボールを投げる。現れたのは、ジュゴン。
「許さぬぞ！人間！」
麻痺したというのに、レックウザの闘志は衰えない。それどころ

か、ますます怒り、高まっている。
「通訳は結構ですよ、お嬢様！…ジュゴン、『ねこだまし』！」
ジュゴンが、小さな手を叩く。びくりと、レックウザの巨体が怯む。
「今です！『れいとうビーム』！」
氷タイプの技は、ドラゴン&飛行タイプのレックウザには効果抜群。大ダメージを受ける。
ただしそれは、『当たれば』の話だ。
「…馬鹿な！麻痺してなお、これほどの速さで動けるとは…！」
『ねこだまし』の追加効果で怯んだレックウザだったが、発射された『れいとうビーム』を飛んで回避してみせた。
「…はっ！伊達に伝説と呼ばれておらんわ！」
驚くラスタを嘲い、麻痺したとは思えない速度でジュゴンを翻弄するレックウザ。
「ジュゴン！『こごえるかぜ』！」
「甘いわ！」
広範囲の氷技に、すかさず上空に飛び上がって躱したレックウザは、
「恨むならば、吾輩に刃向った愚かな主を恨め！」
急降下して、ジュゴンを鋭い爪で切り裂いた。
『ドラゴンクロー』。完璧に、決まった。
しかしジュゴンは、倒れなかった。
「なっ…！？」
レックウザは驚き、動きを止めた。
今にも力尽き、倒れそうな、ジュゴンの間近で。
「最大パワーで『ふぶき』！」
「ジュゴォォン！」
瀕死の状態で繰り出される、ジュゴンの『ふぶき』。
「ぐぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉ！！？？」
吹き荒れる『ふぶき』。その威力は凄まじく、庭の木々が全て凍

りつき、私は余波で吹き飛ばされそうになった。
視界が白で覆われ、何も見えなくなる。が、レックウザの苦悶の咆哮ははっきりと聞こえた。
「…やめて」
私の声など、その苦痛の叫びにかき消される。
「ジュゴン！？しっかりしなさい！」
視界が晴れ、私の目に映ったのは、傷つき倒れたジュゴンと駆け寄るラスタの姿。
「…はっ、…はっ…」
そして、荒く息をつくレックウザ。かなりのダメージを負っているようだ。
それなのに、瞳に宿る闘志は微塵も薄らいでいない。
「…ありがとう、ジュゴン。よくやってくれました」
ボールにジュゴンを戻し、レックウザと向き合うラスタ。その手には、すでに三体目のモンスターボールが握られている。
彼の目にも、戦うという決意があった。このレックウザに何としても打ち勝つという、強い決意が。
…私は、何をしているのだろうか。一番の当事者であるはずの私が、傷つくこともなく傍観しているなんて。
「…なかなか根性のあるジュゴンではないか。驚かされたぞ」
にぃと笑う、レックウザ。身体は、ぼろぼろだ。
「そちらこそ、私のジュゴンの『ふぶき』を受けてまだ立っているとは…さすがですね」
賛辞に賛辞で返すラスタ。三体目のボールを握る手が、震えている。…それは怒りか、恐怖か、悲しみか、武者震いか…。
わからない。レックウザの言う通り、空虚な私には。…だけど。
「…いや」
もういやだ。これ以上、傷つくところを見るのは。
このまま戦い続ければ、失ってしまいそうな気がする。…大事な、何かを。

「やめて！ラスタもレックウザも、もうやめて！」
「やかましい！引っ込んでおれ、小娘！」
張り上げた声も、レックウザの唸りに近い怒鳴り声で一蹴されてしまう。
「お嬢様、危険ですからそこにいてください」
レックウザが止まらない限り、ラスタも止まる気はない。静かに言うと、ボールを振りかぶった。
いけない。また始まってしまう。
私は、駆けだしていた。衝動的に。
頭にあるのは、止めなくてはという思いだけ。
「…血迷ったか小娘」
ラスタは、はるか後方にいる私が駆け寄って来ていることに気付いていない。
そして、レックウザの言葉は私にしかわからない。
レックウザの尾が、揺れる。
来る！
そう感じ、振り下ろされた尾を間一髪回避する。…レックウザが麻痺していなければ、躱すことなど到底不可能だっただろう。
「ほう…」
レックウザの目がわずかに見開かれ、
「お嬢様！？」
振り返ったラスタが、悲鳴に近い声で私を呼んだ。
「ラスタ！命じます、動かないで！」
モンスターボールを投げようとした彼を止め、そのまま走る。
手にあるのは、マスターボール。
「小娘、貴様何を…」
「…そこまでよ、レックウザ！」
レックウザの言葉を遮り、マスターボールを向ける。
「戻りなさい、レックウザ！」
私の声と同時に、ボールから放たれた赤い光線がレックウザに当

たった。
「…貴様」
ボールに戻される寸前、レックウザは私の目を見て…笑った。
怒りでも驚きでもない…その目にあるのは、もっと別の…。
緑色の巨体が消えた庭に転がっていたのは、一個の紫色のボール
だった…。

見たくないの（後書き）

…まだ旅立ちもしないなんて…進行の遅さに愕然とするまどろみです。オリジナルキャラばかりで、公式のヒビキくんやコトネちゃんが出てきません。これはまずい！

「…私では、役不足？…そうよね」

ってああ！？カノンお嬢様が心なしかがっかりしておられる！？

「まどろみさん…私の名前を間違えただけでなく、お嬢様をがっかりさせるとは…覚悟はできていますか？」

ひいいいいいいい！！ごっ、ごめんなさいいいいいいいい！！

「作者・まどろみ猫逃亡のため、後書きを終了します。読んでくれた人、ありがとう！」

「近いうちに、私達にも出番があるってことね！」

「…ふん。別に、どうでもいいけどな」

気に入った！（前書き）

はい、前回の後書きでラスタさんに追っかけられたまどろみ猫です。…バトルの描写は難しいです。このお話は、お嬢様の人として、トレーナーとしての成長を描きたいので、バトルはあまりしません。それでもいいよという方は、どうぞお読みください。

気に入った！

屈んで、マスターボールを拾う。
「…お嬢様！ご無事ですか！？」
ゆっくりと、駆け寄ってきたラスタの方を向く。
「…ラスタ」
急に、足から力が抜けた。どうしてだろうと客観的に考えていると、ラスタが抱きとめてくれた。
「ラスタ、大丈夫？怪我とかしていない？」
ポケモンバトルでは、技に巻き込まれてトレーナーが大怪我をすることだってある。心配になって訊くと、
「…！こちらの台詞ですよ、カノンお嬢様…！」
ぎゅっと、抱きしめられた。…よかった、怪我はしていないようだ。
「お嬢様の身が危ういのに、動くななどと…！もう二度と、あんな命令はしないでください…！」
抱きしめてくるラスタの腕は、強くて。
絞り出すような声は、泣き出しそうで。
「…うん。ごめんなさい…」
私は、謝っていた。
ラスタを、苦しめてしまったと気付いたから。

自己嫌悪、というものがある。今の私は、正にその自己嫌悪中だ。
『戻りなさい、レックウザ！』
…何だ、あの言い方は。あれではまるで、私がレックウザのトレーナーのようだ。
…私に、トレーナーの資格などないのに。
「お嬢様、御気分はいかがですか？」
いつの間にか、ラスタが部屋にいた。心配そうに、ベッドで寝て

いる私を窺う。
「…良くは、ないわ。私、レックウザに命令してしまったから」
身体を起こして、膝を抱える。平らな胸だと、この姿勢はとりやすいのだ。
「…レックウザ、怒っているでしょうね」
ナイトテーブルに置かれた、マスターボール。ランプの明かりを受け、妖しい紫色に輝いている。
「あんな偉そうなこと言っておいて…ライチュウもジュゴンも、レックウザだって傷ついた。みんな、私のせいだわ…」
膝に、顔を伏せる。申し訳なくて、ラスタの顔が見れなかった。
「…お嬢様。やっぱりあなたは、お優しい方です」
どんな顔をして、そんなことを言うのか。
「やめて。…私は、優しくなんてないわ」
顔を伏せたまま、言う。胸が、苦しい。
「…やさしく、なんか…！」
ぐっと、溢れてきそうになるものを押さえつける。無理矢理に。
泣かない。泣けない。私に、涙なんてないはずだもの。
「…出て行ってラスタ。一人に、してちょうだい」
そう言わなくては、彼はここに居続けるだろうから。…居たくもない、はずなのに。
「わかりました。カノンお嬢様、お休みなさい」
「…おやすみ、ラスタ」
ドアが、静かに閉められた。
案の定、私の両目から涙が零れることは、なかった…。

カノンお嬢様は、独りを望まれている…。
出て行けと、命じられたならば。その通りに、しなくてはならない。
たとえ私が、お傍にいたいと願っても。お嬢様が、それを望まれないなら。

静かにドアを閉め、私はため息を吐く。無性に、悲しかった。
「…旦那様」
何処か遠い地におられる、敬愛する主人に思いを馳せる。
あの方なら、お嬢様のお心を癒すこともできたのに、と…。
仕方のないことだと、わかっている。あの方は、ご多忙なのだ。
『カノンを、頼んだぞ。無気力で無表情で無感情だと思うかもしれないが、そんなことはないからな』
五年前。屋敷を出て行かれたきり、旦那様は戻られない。
…最初は、旦那様の為だった。ご命令だから、お嬢様のお傍にいた。嫌では決してなかったけれど、本音を言えば旦那様に付いて行きたかった。
それが、いつしか変わった。お嬢様の、お傍にいたいと切望するようになっていた。
「…お嬢様」
ドアの向こう側で、あなたは泣いているのですか？そうだとしても、私は…。
ここから、動くことができないのです。あなたの、ご命令がない限り。

「娘よ！吾輩は貴様を気に入ったぞ！」
目を細め、穏やかに私を見るレックウザ。昨日の敵意はどこへいったのか。
「…ありがとう」
屋敷は、ジョウト地方の孤島にある。孤島といってもそれなりの大きさで、山もあるし湖もある。
パパの、所有地だ。住んでいるのは、元からこの島に生息していた野生ポケモンと、屋敷の使用人さん達だけ。
「…薄い反応だ。もっと喜べ！」
私の反応が不満だったらしく、レックウザは低く唸った。
「これでも、喜んでいるのよ？」

屋敷の裏山。少しひらけた場所で、私とレックウザは向き合っている。時折木々が揺れるのは、珍しい訪問者を見物しに来た野生ポケモンがいるのだろう。
「…そうか？ならばよい！」
尊大な態度で言うと、レックウザは私の目の前に下りてきた。
見上げていると首が疲れるので、正直ありがたかった。
「…娘、昨日の発言を撤回しよう。…すまなかったな」
…何故、私が謝られているのか。謝ろうと、思ったのに。
「レックウザが、私を空っぽって言ったこと？…その通りだから、謝ることなんてないわ」
そう言うと、レックウザはぐるるるる…と唸った。どこか、悔しげに。
「わからないのか、娘？吾輩が間違っていた。貴様は、虚ろなどではない。…虚ろな者に、あのような目はできぬ」
どうして、わからぬのか…。どうやら、私がレックウザの言う事を理解できないのが悔しいらしい。
「吾輩の一撃を避け、単身吾輩に向かってきた貴様の目は、生き生きと輝いておったぞ？…吾輩は、貴様の目に魅せられたのだ！」
じいぃっと、至近距離で見つめられる。…そんなことを、言われても。
「…吾輩の身体に近い、あの空のように澄んだ翠の瞳…あのときの貴様の目は、美しかったぞ？あの目を見たのが吾輩だけというのは、何とも嬉しいことだな！」
言葉通り、レックウザは嬉しそうだった。地表から数メートル浮かび上がって、長い巨体をくねらせ飛行する。
木々に囲まれた、空。天空の化身と呼ばれるレックウザには、狭すぎるだろう。
「…こちらこそ、ごめんなさい。私達親子の都合に付き合わせて…痛かったわよね」
身体も、心も。傷付いただろうに。

「そのようなこと、伝説と呼ばれし吾輩達には日常だ。…娘が気にすることではないよ」
飛行を止め、優しい目で、レックウザは言う。
「…遥かな昔から、吾輩の強大な力を欲する人間と、戦い続けてきた…。だが、あの男は違った。あの男が望んだのは、『吾輩と、娘がトモダチになる』こと…」
あの男とは、パパのこと。
「初めて貴様を見た時は、冗談ではないと思ったが…今では、悪くないと思っておる」
首を振る。それでは、ダメだ。
「私には、あなたといる資格はない…私には…」
俯いた私に、
「な、泣くなよ！？」
慌てたレックウザが、声をかける。
「資格など、必要なかろう！？吾輩が勝手に貴様の傍にいると言ったのだ！…だから、その…難しく考えるな！これだから人間は…！」
わたわたと忙しなく飛び回るレックウザの影が、地面に映る。
「…泣いて、ないわよ…。レックウザ、ありがとう」
顔を、上げる。こんな私を、慰めようとしてくれるレックウザの気持ちが、嬉しかった。
「…何だ。娘、そんな風に笑えるのではないか」
にっと、レックウザが笑った…。

気に入った！（後書き）

ポケモンは道具ではない！…そうであるかはトレーナー次第だと思います。対等？そんなのありえないというのも、また一つの考えです。

ポケモンとはこういう存在であるというのは、トレーナー自身が考え、決めることだと思います。悪だの善だの、そんなものは幻想にすぎません。絶対なる悪も、絶対なる善も、存在しないのです。それが、私の考えです。

読んで下さった方、ありがとうございました！

狙いくる者（前書き）

初めて買ってもらったポケモンは、金・銀でした…。赤・青・緑は姉の世代です。私は金、妹は銀を買ってもらい、仲よく遊びました。…懐かしいです。

しかしです。それ以降の作品もプレイし、さまざまなポケモンを育ててきたまどろみ猫も、どんな技を覚えるかはうろ覚えです。そのため、一番末の妹が持っている攻略本に頼ろうとしていたのですが…売り払われていました。

だから、今日買ってきました！ポケモンの図鑑、見ているだけで楽しいです！

狙いくる者

「…娘よ、名は、何と言うのだ？」
吾輩は、この変わった娘に名を尋ねた。まさか、吾輩が人間に興味を持つ日が来ようとは…。
「カノンよ。レックウザに、名前はあるの？」
吾輩の名…そんなものはない。一匹で生きる吾輩には、必要なかったのだ。
「ない。…カノンよ、貴様が吾輩の名を付けよ」
この娘なら、名付けられてもよい気がする…。
「いいの？…う～ん…」
しばし、真剣な顔で考え込む娘。今更ながらに気が付いたが、この娘、なかなか可愛い顔をしている。
やけに必死になって娘を守ろうとしていたあの男。名は確か…ラスタと言ったか？…ほほう。そういうのも、面白いやもしれぬな。
などと考えていると、
「レッシー！レッシーでどうかしら！？」
娘…カノンが、昨日とは違う輝きに満ちた瞳を、吾輩に向けた。
…レッシー？
がぱっと、顎が外れそうになる。…開いた口が塞がらないとは、正にこのこと。
「…すまぬ。レッシーだけは勘弁してくれ…！」
純真な瞳から目を逸らし、吾輩は嘆願する。レッシーだけは、何としても回避しなくては！
「…気に入らなかった？レックウザ…」
しょぼんと、落ち込むカノン。一生懸命考えてくれたのだろう。罪悪感がずきずきと痛んだが、それでも！
「…すまぬな」
レッシーは、レッシーだけは！

「わかった…。ごめんね、レックウザ」
項垂れるカノン。どうすればよいのか…話題を、変えればよいか！？
そうか、それだ！…ナイス、吾輩！
「そ、そうだ！カノン、あのラスタという男はどうした？」
「……ラスタは、パパからお屋敷の管理も任されているから、忙しいの…」
無表情の中に、どこか寂しさを漂わせ、カノンは言った。
「…ラスタ、本当はパパに付いて行きたかったの。昨日、レックウザが言った通り」
…地雷だったようだ。昨日の吾輩を、全力で殴りたくなった。
いかん！ますます沈んでいる！
ええい！引き揚げられるか！？
「…そうか？吾輩には、あの男がカノンのことしか考えておらんように見えたぞ。あそこまで必死になるのだ、もっと己に自信を持て」
「自信…？でも、私には…」
…そこまで、自身を卑下することもあるまい。
「安心しろ。カノンは欠けたりしていない。…ただ少し、心に鈍いだけだ」
実際、そうだと吾輩は思っている。この娘には、ちゃんと『感情』がある。
「…そう、なのかな…」
戸惑うカノンに、力強く頷いてみせる。
「そうだとも！…そうだな、吾輩と旅に出てみないか？世界は広い、色々な人やポケモンと出会えるぞ？」
天を仰ぐ。晴れ渡った空は、どこまでも広い。
「カノンは、空虚ではない。…旅をすることによって、それを知るだろう」
辛いことも、楽しいことも、悲しいことも、嬉しいことも…もっと、味わうべきなのだ。

「旅…旅すれば、私は…」
カノンも、空を仰いだ。囁きが、吾輩にも聞こえた。
「…変われる、かしら…？」
「変われるとも。そう願い、行動すれば」
ほとんど思いつきだったが、なかなかいい案ではないか？カノンも、元気になったようだし。
…流石だな、吾輩！
得意になっていると、そっとあたたかいものが、吾輩の背を撫でた。何だ？
「…ありがとう、レックウザ。私と一緒に、旅に出てくれる？」
あたたかいものは、カノンの小さな手で。遠慮がちな、微笑みを浮かべて。
…まったく、変わった娘だ。
「よかろう。吾輩とカノンは『トモダチ』だからな！」
以前の吾輩ならば、そんなことは欠片も思わなかっただろうに。
今では、そうありたいとまで思っているのだから。

「…レックウザ、発見！捕獲作戦開始！」
穏やかな空気を乱したのは、人間。
「…飛ぶぞ、カノン！」
「きゃ！？」
本能で危険を感じ、カノンを掴んで上空へと逃れる。手の中のカノンを潰さないよう気を付けながら、地表に目をやる。
先程まで、吾輩達が立っていた場所に『れいとうビーム』が放たれていた。
直感に従っていなければ、直撃だっただろう。
「レックウザ？急に、どうしたの？」
手の中のカノンが、事態をわからず尋ねてくる。
「…敵だ。吾輩を、捕らえようとしている」
答えた声が固くなったのは、カノンの存在を再認識したからだ。

…このままでは、応戦できない。
「連続で『れいとうビーム』と『１０万ボルト』だ！絶対当てろ！」
考える時間も与えられずに、地表から技が放たれる。躱しながら、吾輩は更に上空を目指そうとして…やめた。
吾輩は、大気圏でも生きられる。しかし、カノンは？人間の身が、上昇して耐えられるのか？
…わからないなら、すべきではない。そう判断し、回避を続ける。
「…飛行部隊！その娘を狙え！トレーナーだ！」
敵の怒鳴り声。…飛行部隊だと！？
首を巡らすと、こちらに向かってくる無数の黒い影。
「…ゴルバットだわ」
流石の我輩も、カノンに目を向ける余裕はない。地上からの技と、大量のゴルバットの『エアカッター』を回避しつつ、この状況を打破する方法を考える。
どうすればよいのか。今は何とか躱せているが、いずれ当たる。だが、反撃しようにもカノンが手の中にいる。…戦いにくいし、危険だ。
逃げ出そうにも、すでにゴルバットの群れに囲まれている。強行突破も考えたが、それもカノンのことを考えると…。
「…レックウザ、私に考えがあるのだけれど…」
八方塞の我輩に、遠慮がちに声をかけるカノン。
「考え！？どのような考えだ！？」
ますます激しくなる攻撃。手を講じなくてはと焦る吾輩に、カノンが提案する。
「…駄目だ！危険すぎる！」
しかしそれは、『吾輩』ではなく『カノン』が危険にさらされる作戦だった。
「ぐっ！？」
「レックウザ！？」
気が逸れ、不覚にも一撃もらってしまった。不幸中の幸い、『れ

いとうビーム』ではなかったが。
「お！当たったぞ！もっと当てて弱らせろ！」
オニドリルに乗り、ゴルバット達を指揮する男が言う。…調子にのりおって！
「…でも、このままじゃレックウザが…！私のことなら、気にしないで！」
必死に、カノンが言いすがる。自身より、吾輩の身を優先するとは…。
こんな状況にも関わらず、笑みが浮かぶ。…尾に、痛みが走ったが、大して気にならない。
「…わかった…良いのだな、カノン？」
手の中の娘。その目に恐れの色はなく、吾輩が魅せられた煌めきがあった。
「ええ！…いくわよ！」
頷き、カノンは紫色のボールを、吾輩へと向けた…。

狙いくる者（後書き）

お読みくださり、ありがとうございます！今回はレックウザ視点です。彼（伝説のポケモンであるレックウザに性別はありませんが、オスっぽいので彼と呼びます）は、今まで見てきた人間とは違うカノンお嬢様に、自分でもよくわからない感情を抱いています。…なにやら、誤解を招きそうな表現ですが、これからカノンお嬢様とレックウザは絆を深めていくのです。

レッシー…可愛い名前だと思うのですがねぇ…？

構想はあらかたできているのですが、何分時間がなくて…不定期になってしまうかもしれません。ごめんなさい！

…ペンドラー可愛いですよペンドラー…（ぼそり…）。

…仕方なかろう！『はかいこうせん』、決め技であろう！？（前書き）

…頑張りました！睡眠時間？そんなのどうでもいいのです！書きたかった！書けた！嬉しいです！

妹に、技を漢字で書かないのかと訊かれました。…ひらがなは『ださい』そうです。漢字で書くと、だいぶ感じが変わってしまうのですよ！だからです！

…仕方なかろう！『はかいこうせん』、決め技であろう！？

私を掴んで飛行していたレックウザを、ボールに戻す。
当然、私は落下する。
しっかりとマスターボールを握り、真っ逆さまに落ちて行く。私達を取り囲んでいたゴルバットが、オニドリルに乗った男性が、驚いているのが見えた。
「気は確かか！？…だがチャンスだ！ゴルバット！マスターボールを回収しろ！」
男性の指示に従い、ゴルバット達が私の手にしたマスターボール目指して降下する。
…そう。『私』目指して『一直線』に。
笑みが、こぼれた。この高さから地面に墜落すれば、命はない。けれど、それでも私は、笑っていた。
地上からの攻撃は止んでいる。何もせずに、ゴルバット達がレックウザをゲットするのを待っているのだろう。
風を切り、重力に従う身体。腕を少し動かすのも大変だった。
「…レックウザ！お願い！」
何とか腕を真上に向け、ボールの開閉スイッチを押す。
「任せよカノン！…くらえ！」
現れた、巨大なドラゴンポケモン。大きな口を開いて、吼える。
「しまった！？散れ、ゴルバット！」
男性が指示するも、時すでに遅し。
レックウザの口に集束した光線が、一直線に降下していたゴルバット達を消し飛ばす。
「…『はかいこうせん』」
圧倒的なまでの威力。一掃されたゴルバット達。それは計算通りだったけれど。
「…反動で、動けなくなるのよね…」

現在も落下している私。固まったレックウザが遠のいていく。
もうすぐ、地面に激突する。…恐怖は、ないけれど。
ラスタ…私のこと、忘れちゃうのかな…。
レックウザは、空虚じゃないって言ってくれた。それなら…
残れば、いい。彼の中に、少しでも。
私が。…どこまでも、身勝手ね。
目を閉じる。最後に見られたのは、雲一つない空と、焦げて落ちて行くゴルバットと、…レックウザ。
私の、初めての『トモダチ』…。

「カノン！」
…レックウザ？
ふわりと、優しいものに包まれる。落下が、止まる。
鮮やかな緑が、目に入った。
「…間に合ったか！胆を冷やしたぞ！」
「あれ？…レックウザ？」
私は、レックウザの手の中にいた。…助かった、ようだ。
下を見ると、地面まで数メートル。
「ゴルバット共は倒したぞ！待っておれ、残ったあやつらを…お？」
レックウザが、驚きの声を上げた。何だろうと首を巡らせると…。
鬼が、いた。
「…あやつら…哀れな…」
遠い目をして、レックウザが呟く。そっと、私を地上に下ろしてくれた。
「…ラスタ…！」
鬼が、にっこりと笑う。
「お嬢様、…お姿が見えないと思えば…」
立ち上る怒気。顔は笑っているが、目が笑っていない。
「お説教は後です。…この不法侵入者二人を、ジュンサーさんに突き出してからたっぷりとして差し上げます」

ルージュラとエレブーを従えた男性と、オニドリルに乗った男性。
「ど、どうする！？」
「…何かヤバそうだ！逃げるぞ！」
怒るラスタに逃げ腰となった二人を、
「逃がしません」
軽く放られた、三つのモンスターボール。フシギバナ、カメックス、リザードンが、二人と三匹のポケモンを睨み据える。
加えて、こちらにはレックウザもいる。男性達の顔から、血の気が引いていく。
「さぁ…お仕置きの時間ですよ？」
爽やかに、ラスタが言った。
男性達の悲鳴は、島中に響き渡ったという…。

「…どうして、私に声をかけてくださらなかったのですか？」
抑えた声でそう言うラスタは、私を見ていない。
「…昨日、レックウザをボールに戻せたのは、運がよかったからです。そんなこともわからないお嬢様ではないでしょう？」
ぼろ雑巾と化した男性二人と、戦闘不能となった三匹のポケモンをジュンサーさんに突き出し、ラスタのお説教が始まった。
相当怒っている。見上げているのに、目も合わせてくれない。
レックウザは、神妙な顔で私達を見守っている。…遠い。
「わかっていたけど…でも、ラスタは忙しいでしょう？邪魔しちゃいけないと思って…」
「そんな気遣いは無用です！」
私の言葉を遮り、ラスタが怒鳴る。
「お嬢様は、わかっていらっしゃらない！私はお嬢様をお守りするためにいるのです！それなのに、私に黙って屋敷を抜け出して、あんな危険な真似をして！…レックウザが間に合ったから良かったものの、一歩間違えば死んでいたのですよ！？」
「いや、それはカノンが悪いのではない！カノンは『りゅうのはど

う』がよいと言ったのに、吾輩が『はかいこうせん』を…」
私をフォローしようとしたレックウザだったが、
「レックウザは引っ込んでいてください！」
ラスタのものすごい剣幕に、ぐっと唸って引き下がる。
「…ごめんなさい。私に何かあれば、ラスタがパパに怒られてしまうわね」
考えていなかった。ラスタは、私の面倒も任されていたのに。
「…違う！」
「！？」
激昂したラスタに、肩を掴まれた。…痛い。
「違う！そうではないのです！…私は！」
肩に、ラスタの指が食い込む。痛い。
「私は！お嬢様をお守りしたいのです！お嬢様の、その自分の身を顧みない行動が、どれだけ私の心を抉るか知っていますか！？…旦那様は、関係ありません！私は、私の意思でお嬢様をお守りしたいのです！」
理解できない。パパを抜きにして、どうしてラスタが私を守ろうとするのか。
「…わからないわよ…！なんで！？どうして！？」
ますます力のこもる指が痛い。怒鳴るラスタが怖い。
上空から落下するよりも、ずっと。
「……わから、ないわよ…！」
目頭が、熱くなった。何かが、溢れてくる。
「！？ラスタ！カノンを泣かせたな！？」
レックウザが吼える。…泣いている？私が？
ラスタが、狼狽する。肩にこもっていた力が、抜けた。
「…カ、カノンお嬢様！？」
おろおろと、ラスタが覗きこんでくる。
「…ラスタ、私、泣いているの？」
目元を触ると…濡れて、いる。

「はい！…お嬢様が泣かれるところなど、はじめて見ました！」
微笑むラスタ。どこか、嬉しそうだ。
「…どうして、嬉しそうなの？」
ついさっきまで、あんなに怒っていたのに。
「お嬢様が、ご自分の感情を露わされたからですよ！…申し訳ありません、痛かったでしょう？」
「…痛かったけど…いいの。ラスタが、笑ってくれたから」
心配をかけてしまった。そこまで、私のことを思っていてくれたなんて、知らなかった。
「…っ！ありがとう、ございます…！」
…あれ？ラスタの顔、ちょっと赤い…？
…熱でも、あるのだろうか…？

…仕方なかろう！『はかいこうせん』、決め技であろう！？（後書き）

『はかいこうせん』！？アニメで観るとかっこいいですよね。
…時間ないです。仕事行かなくては…。仕事中に、アイディアが湧くこともあるので、頑張りたいです。…『人』を見たくは、ないのですがね。
…ご覧になって下さった方、ありがとうございました！

旅立ち（前書き）

ポケモンの夢をみました、まどろみ猫です！ゲームでは技の効果とか能力値とか戦っている最中でも見れますが、現実では（夢ですが）そんな暇はありません。ですが、何より困るのは…ボールに入っているポケモンがわからないということです！アニメでも、なんでわかるのでしょうか！？

やっとお嬢様の旅立ちです！あ、アニメでは十歳で旅立ちですが、この小説では年齢制限なしです。でも正直、十歳で旅立ちなんて危険すぎだと思います。

…さようなら、ラスタ！キミにもまたいつか、出番はある！

旅立ち

「旅に出たいの」
そうおっしゃったカノンお嬢様。その頬を伝っていた涙を指で拭い、私は笑った。
乱れる心。悟られぬように。
お嬢様が私のことを、気に掛けてしまわれないように。
「そうですか。わかりました、旦那様には私からお伝えしておきますね」
…いつか、こんな日が来るとわかっていた。来ないでほしいと、願っていた。
だけど、お嬢様が望まれるのなら…私は、見送ろう。
笑顔で。お嬢様の、ご無事と成長を願って。

「…あの状況で『はかいこうせん』はダメだろう。ちょっと考えればわかるだろ？」
むう。ラスタのフシギバナが、咎めるような目で吾輩を見てくる。
「うん。フシギバナの言う通りだ。…レックウザ、どうして『はかいこうせん』を？」
カメックスも、リザードンまで。
「…仕方なかろう！『はかいこうせん』、決め技であろう！？」
こちらを目掛けて降下してくるゴルバットの群れ。気分が高揚して、気が付いたら『はかいこうせん』発射していた。
「「「……」」」
三匹とも、呆れてものも言えないといった様子だ。…は、反省しておるから、そんな目で見るな！
「…なぁレックウザ…ラスタ、お嬢様のこと大好きだからさ…頼むぞ、ほんと」
…視線が痛い。

「でも、お嬢様この島から出てっちゃうんだよなぁ…ラスタ、大丈夫だろうか？」
カメックスの視線が、少し離れたところで話している二人に向けられる。よし、気が逸れた。
「そうだよな…。屋敷なんてほっといて、二人で旅すればいいのにな」
フシギバナも。
「あぁ…。どこの馬の骨かもわからない男に、世間知らずなお嬢様が騙されたら、ラスタがどうするか想像するだけで怖い」
ぶるっと、身震いするリザードン。…何を想像したのか。
「ラスタも、自覚がないのがまずいんだよなぁ…」
「仕事一筋に見えて、お嬢様一筋なんだよな…自覚してないけど」
…何だ。本人たちよりも、ポケモンのほうがよく見ているではないか。
「…いや待てよ！？離れて自覚するかもしれないぞ！？」
リザードンの言葉に、
「おお！あるかもしれないな！」
「それで、追っかけたりするかもな！？」
盛り上がり始める三匹。…何としても、あの二人にくっついてもらいたいらしい。
会話の末、『このままでは進展しないから、一度離れてお嬢様の存在の大きさを自覚させよう』という方針になった。
「…カノンが旅している内に、出会った男を好きになったらどうするのだ？」
吾輩の疑問は…黙殺された。ひどいぞ！
ラスタは、反対しなかった。わかりましたと、笑ってくれた。
猛反対を予想していた私は、拍子抜けした。…少し、がっかりもしていた。
「行かないでください」

そう、引きとめて欲しかったのかもしれない。このままの私でも、傍にいていいのだと…。
ふるふると、首を振る。何を考えているのか。
そんなことを期待されても、ラスタだって困るだろう。
明日、屋敷を旅立つ。…ラスタとは、当分会えない。
そこに思い至って、胸の奥が疼いた。住み慣れたお屋敷を、豊かな自然のこの島を離れることよりも、それが辛い。
そう、『辛い』。…私にも、感情はあったのだ。
ソファに座り、ぎゅっとぬいぐるみを抱きしめる。古いけれど、メイドさんが洗濯してくれるから汚くはない。
ピカチュウの、ぬいぐるみ。十歳の誕生日に、ラスタがくれたもの。
連れて行くわけには、いかないから。
今、抱きしめておかないと。
机の上に置かれた、ショルダーバックとベルト。ベルトにはすでに、マスターボールがセットされている。
…私、頑張るから。今までずっと、ラスタやメイドさん達に何でもしてもらっていたけど、全部自分の力でやるから。
失敗するだろうけど、挫けないから。…辛いことがあっても、逃げ帰ったりしないから。
だから…私を、たまにでいいから思い出してね？

いつもより、二時間も早く目が覚めた。ベッドで何度も寝返りを打つも、眠れそうになかったので起きる。
自分でカーテンを開けると、群青色の空に金色の星が数個、瞬いていた。まだ、陽は昇っていない。
空を、眺める。…じっと、陽が昇るまで。
今日も、晴れるだろうなと思いながら。

「…ワカバタウンの、ウツギ博士？ポケモン進化の権威である、ウツギ博士？」

この島は、ジョウト地方の隅に位置している。一番近い町は、タンバシティだ。
私は水ポケモンを持っていないので、レックウザに乗せて行ってもらおうとしていた。大きな背中に乗せてもらい、行先を告げようとした私に、ラスタは封筒を差し出してこう言ってきた。
「お嬢様。…ワカバタウンのウツギ博士に、この封筒を…」
届けろ、ということだろう。受け取った封筒は薄く、陽に透かすと紙が一枚入っていた。
「手紙？…古風ね」
パソコンやポケギアなど、電子連絡のほうがはるかに早い。屋敷にもあるし、研究者であるウツギ博士だってパソコンを所持しているだろうに。
「…旦那様が、わざわざポケモンに持たせて転送されてきたのです。ご友人のウツギ博士に、お嬢様の手で届けてほしい、と…」
苦虫を噛み潰したようなラスタ。敬愛するパパの指示なのに、不満があるようだ。
「お嬢様、お疲れになったら無理せず休んでくださいね？この島からワカバタウンまでは距離があります。レックウザなら大した距離ではないでしょうが…」
「ふん、当たり前だ！」
レックウザが、得意げに言う。早く飛び立ちたい様子だ。
「調子にのって、スピードを出してはいけませんよ？それから…」
その様子に、ますます心配になったらしいラスタ。ここらへんで止めないと、延々と続いてしまう。
見送ってくれるメイドさんや庭師さん、コックさんが、複雑な顔をしてラスタを見ていた。
「大丈夫よ、ラスタ。無理はしないから。…じゃあ、いってきます」
軽く手を振る。メイドさんたちが、一斉に頭を下げた。
「「「いってらっしゃいませ、お嬢様」」」
初老の庭師さんとコックさんが、笑顔で手を振りかえしてくれる。

「気をつけてな～お嬢！」
「お帰り、お待ちしています！」
…あれ？何だろう、この気持ち？
みんなを見ていると、行きたくないような…。
「…うん。ありがとうみんな」
これが、『別れ』の痛みなのだろうか。旅に出る前に、新しい『思い』を知ることができた。
頃合いかと、レックウザの巨体が浮き上がる。…いよいよ、出発だ。
「…っカノンお嬢様！少し、お待ちください！」
ラスタが、駆け寄ってきた。
「貴様、いい加減に…！」
怒り出そうとしたレックウザだったが、制止してきたラスタが持つものを見て口をつぐんだ。
リボン。ライトグリーンの、リボンだった。
「失礼しますお嬢様。すぐ、すみますから！」
レックウザの背中に、身軽に跳び乗ったラスタ。私の後ろに回る。
…突然髪を触られて、驚いた。
「きゃあ～！」
「…おお！」
何やら、黄色い声が聞こえてきた。…どうやら、ラスタは私の髪をまとめてくれたようだ。
「…似合っておるぞカノン。カノンの瞳と同じ色の布が、黒い髪によく映えるな」
レックウザが、褒めてくれた。メイドさん達も、
「お嬢様、お似合いです！」
「可愛いですよ～！」
口々に、褒めてくれる。……なんだか、こそばゆい。
このリボンはきっと、旅立つ私への餞別だろう。腰までとどく髪は邪魔になるかなと思いはじめていたけれど、これで大丈夫だ。

「ラスタ、ありが…！？」
お礼をと、振り返りかけた私。後ろに立つラスタに、阻まれた。
首に回されたラスタの腕。背中に感じる体温。
少し遅れて、脳が状況を理解した。…ラスタに、後ろから抱きしめられている。
「「「…っきゃあぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！？？」」」
悲鳴に近い歓声が響く。レックウザが、絶句している。
「…カノンお嬢様、私の顔を見ないでください。見ないまま、旅に出てください」
耳元で、そう囁かれる。…何で？どうして？と、訊きたいのに。
「…わかったわ。ラスタ、リボンありがとう」
あなたの顔を見て、お別れを言いたいのに。
「いってきます。元気でね」
私は、訊かなかった。言わなかった。
「こちらこそ…ありがとうございました。お気を付けて」
そっと、ラスタが離れる。…温もりと、一緒に。
「…よし！行くぞ、カノン！」
レックウザの声とともに、地上が遠のく。
「お嬢様～！」
「頑張ってください～！」
メイドさん達の声が遠い。どんどん、離れていく。
「…みんな！またね！」
地上に向けて、声を張り上げる。聞こえただろうか？
感じる、風。天高く、舞い上がる。
…出発だ。

旅立ち（後書き）

…ゲームでのライバル（ジョウト地方の、赤毛の彼です）は、ツンデレだと思います。思う、じゃなくて確信しております。あぁ早く彼を登場させたい…！

今日は、人物設定を書いておりました。公開はしませんが、各々の手持ちポケモンを決めました。できるだけジョウト地方のポケモンです。伝説ポケモンはなしの方向で！

お付き合いくださった方、ありがとうございました！駆け足展開、申し訳ございません！

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4861z/

ポケットモンスター　～お嬢様とレックウザ～

2011年12月25日15時50分発行